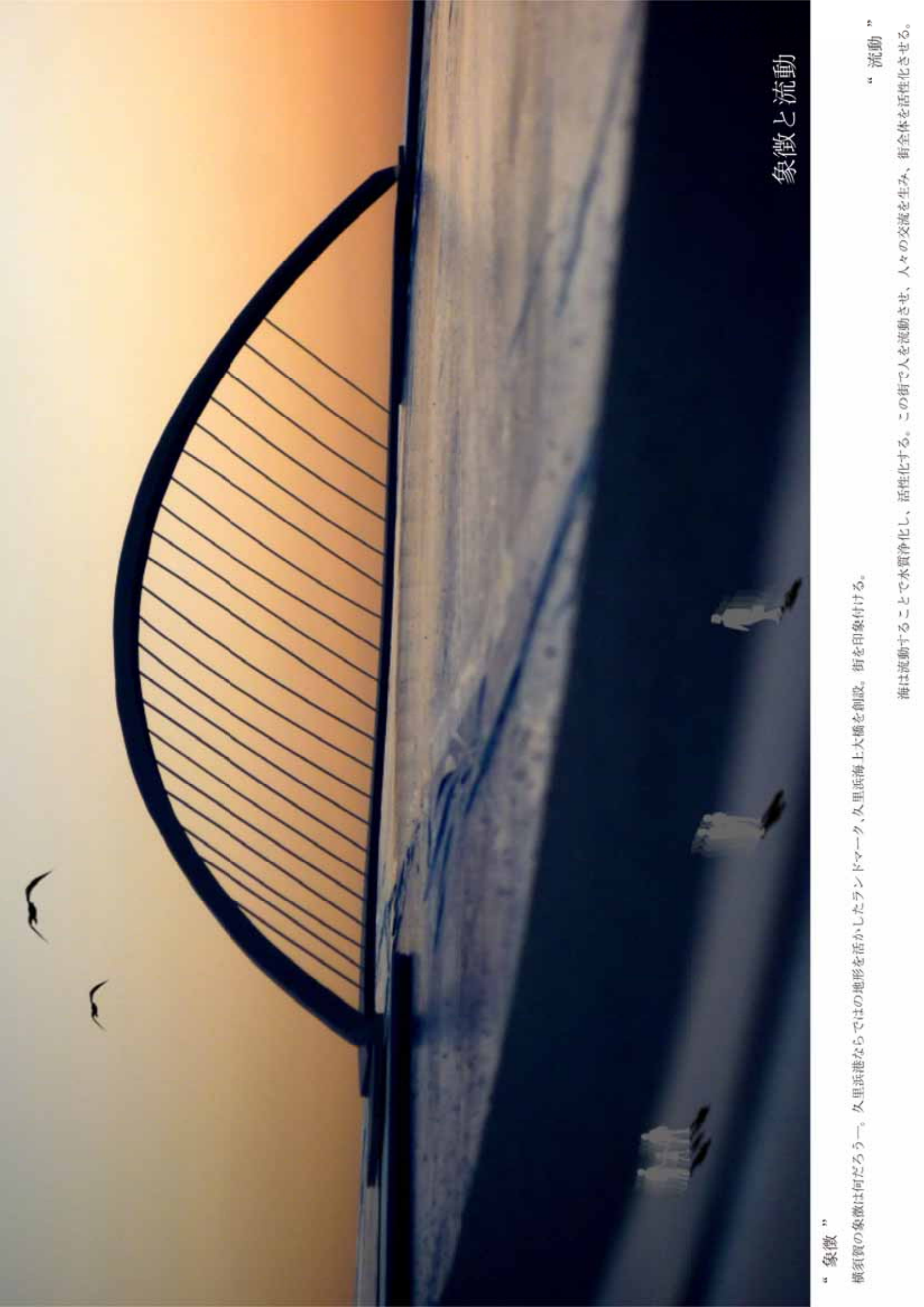


デザイン賞
(京浜港湾事務所長賞)

「象徴と流動」

齊藤伊智朗 足立栞 杉沼知規 野口一乗



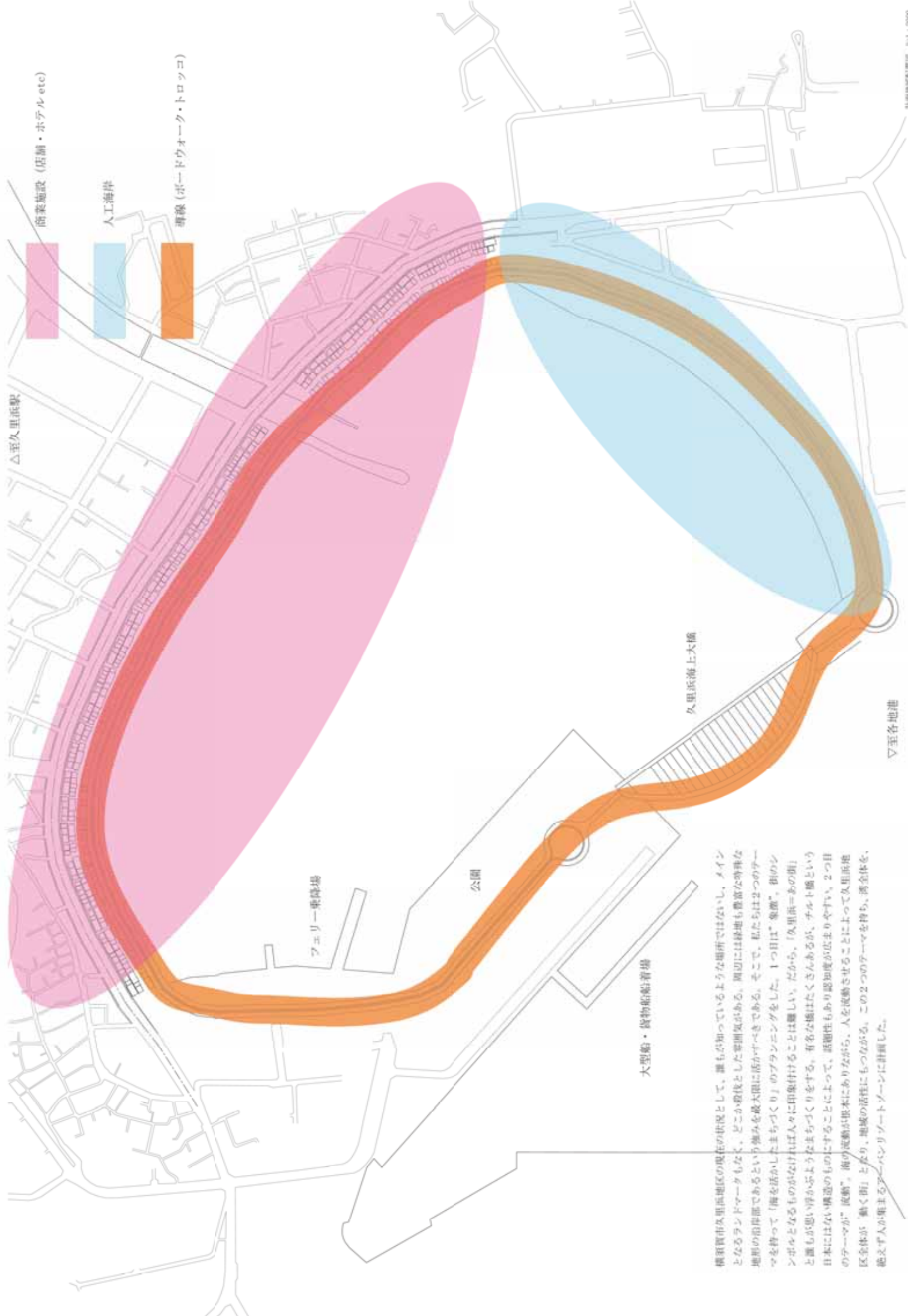
“ 象徴 ”

横須賀の象徴は何だろう。久里浜港ならではの地形を活かしたランドマーク、久里浜海上大橋を創設。街を印象付ける。

象徴と流動

海は流動することで水質浄化し、活性化し、活性化させる。この街で人を流動させ、人々の交流を生み、街全体を活性化させる。

“ 流動 ”



横濱市久里浜地区の現在の状況として、誰もが知っているような場所ではないし、メインとなるランドマークもなく、どこか寂れたとした雰囲気がある。周辺には緑地も豊富な特殊な地形の沿岸部であるという強みを最大限に活かすべきである。そこで、私たちは2つのテーマを持って「街を活かしたまちづくり」のプランニングをした。1つ目は「集落」。街のシンボルとなるものがなければ人々に印象付けることは難しい。だから、「久里浜=あの街」と誰もが思い浮かぶようまちづくりをする。有名な橋はたくさんあるが、チルト橋という日本にはない構造のものにすることによって、話題性もあり認知度が広まりやすい。2つ目のテーマが「流動」。海の流動が根本にありながら、人を流動させることによって久里浜地区全体が「動く街」となり、地域の活性にもつながる。この2つのテーマを持ち、湾全体を、他ええ人が集まるアーバンリゾートゾーンに計画した。

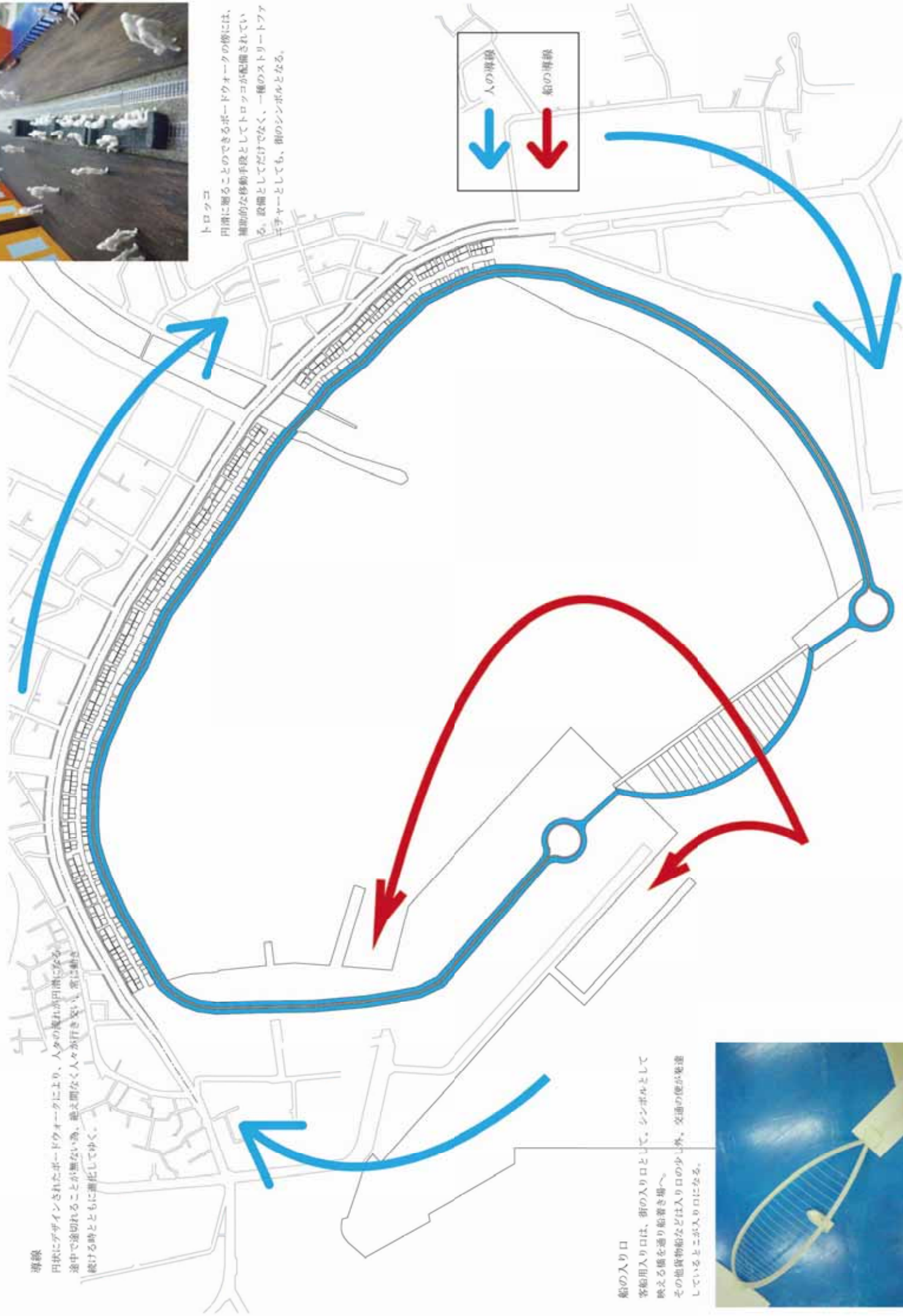
導線

円状にデザインされたボードウォークにより、人々の流れが円滑になり、途中で途切れることが無い為、途え間なく人々が行き交い、常に動き続ける時とともに灌漑してゆく。



トロワッコ

円滑に廻ることのできるボードウォークの傍には、補助的な移動手段としてトロワッコが配備されている。設備としてだけでなく、一種のストリートファニチャーとしても、街のシンボルとなる。



船の入り口

客船用入り口は、街の入り口として、シンボルとして映える様を通り船着き場へ。その他貨物船などは入り口の少し外、交通の便が発達しているとここが入り口になる。





久里浜港は都心から50km圏内で、千葉県富津市とフェリーで40分の距離にあり、人を集めるために好条件である。しかし、観光よりも物流に優れた府というイメージで、集積となるものがない。そこで、久里浜海上大橋を創設。ただのランドマークであるだけでなく、この地域で人を動かすための大切な役割を果たす。また、橋は久里浜への入り口で、そこをくぐると久里浜らしい景色が広がり、観光に来たことを強く実感させる。フェリーを各地と結び、フェリーでの観光客を増やす。橋の両脇にはトロツコの折り返しがあるため、歩いて橋を渡ることも、そこから湾の内側を見ると、ずらりと並ぶ土蔵風の商業施設の姿があり、反対を見れば一面の緑である。橋の東側は海岸、西側は公園になっていて、子供の遊び場と大人の憩いの場を提供する。

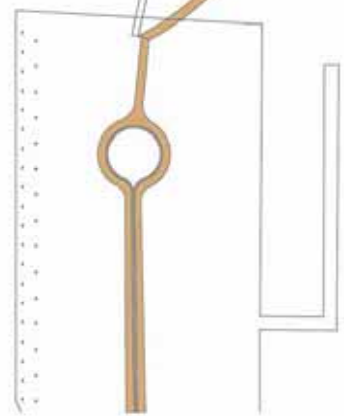
久里浜海上大橋

これはシャトル橋と言って、橋がかかる方向を軸として回転するタイプの可動橋である。片方のアーチが歩道になっていて、フェリーが来たときには約45°回転して歩道が持ち上がる。時間によって歩道が見え、見た目にも美しい全長300メートルの大橋で、久里浜のランドマークとなり全国に街の認知度を上げる。



海岸

白い砂浜が整備された人工の海岸。海水浴や浜で砂遊び、少し離れておしゃべりなど各々の自由な空間になる。夏は花火大会の見物場など様々なイベントを開催することで、たくさんの人で賑わう。また、西向きなのでサンセットが美しい。



公園

湾の内側には等間隔にベンチが設置されていて、そこから朝日に照らされる商業施設の街並みや夕日に照らされる海岸など、湾内を一瞥することができる。ボードウォークを挟んで反対側は、大きなフェリーから物品や車が搬入される。

橋周辺平面図 S=1:1000





商業施設

久里浜を賑わせる「人々の通り道」、そこには自然豊かな水辺が広がっている。この「人々の通り道」を活かして横須賀の海を活かした街づくりを成し得ないだろうか。現状を振り返ると、海沿いには殺風景な神武が広がり、また「港町」という活力、力強さがあまり感じられない。特に賑わわない街並みが続き、統一感の無さから活気が損なわれている。



建物の高さ、外観に統一性をつくり「港町」という活気を景観から表現する。湾曲した地形を生かし、海沿いに商業施設を配置し、「人々の通り道」に動きを加えアクティビティを生み出す。

